

第34回「ことば」フォーラム

敬語と方言
—ふるさとのことば—

2008年10月17日（金）

岡崎市民会館集会室

杉戸清樹（国立国語研究所）

梅津正樹（NHKアナウンサー）

阿南 愛（ヤフー・ジャパン株式会社）

井上文子（国立国語研究所）

あいさつ
挨拶 石川 まさる
優（岡崎市副市長）

後援：岡崎市・岡崎市教育委員会

NHK名古屋放送局

中日新聞社・東海愛知新聞社

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（朝日） ただ今より、独立行政法人国立国語研究所 第34回「ことば」フォーラムを開催いたします。本日の総合司会は、私、国立国語研究所の朝日が担当いたします。よろしくお願いいたします。まず初めに、開催地であります愛知県岡崎市を代表いたしまして、岡崎市副市長の石川^{まさる}優^{あいきつ}様から御挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

石川 皆様、こんにちは。御紹介いただきました岡崎市の副市長の石川と申します。国立国語研究所の「ことば」フォーラム in 岡崎の開催にあたりまして、開催地を代表してひとこと御挨拶を申し上げます。本日は、皆様御多忙のところ多数御参加くださいまして、誠にありがとうございます。この岡崎市と国立国語研究所とのご縁は、昭和28年「ことばの調査」に多数の岡崎市民が協力したことに始まったと聞いております。国立国語研究所の調査は20年後の昭和47年にも第2回が実施され、昭和28年と同じ方々が協力いたしました。このように複数回にわたり同じ地域、同じ方々が協力した言語学的調査は世界に類を見ないものであります。学術的にも貴重であると聞いております。さらに国立国語研究所では、この11月から来年にかけて、この岡崎市において3回目の敬語調査を計画していると伺っております。岡崎市といたしましても、学術的に価値の高い調査の3回目を実施されることをたいへんうれしく思っております。さて本日は、「ことば」フォーラム in 岡崎と題し、敬語と方言についての講演とトークショーが用意されております。会場の皆様には、岡崎の方言の大切さについて再認識していただく機会として、また、この岡崎で行われた敬語調査の価値を知っていただける絶好の機会となれば誠に幸いです。限られた時間ではありますが、実りの多いフォーラムになることを祈念いたしまして、簡単ですが、私の御挨拶とさせていただきます。（拍手）

司会 石川様、ありがとうございました。続きまして、国立国語研究所所長の杉戸より御挨拶いたします。

杉戸 失礼いたします。皆様、ようこそお越しくございました。所長の杉戸清樹と申します。本当にお天気の良い秋のこの週末、事前に申し込んでいただくというお手数も掛けまして、しかし大勢の御参加をいただいております。本当にありがたいことだと御礼申し上げます。私ども国立国語研究所は昭和23年に発足いたしておりますが、今年でちょうど創立60周年を迎えております。普段、私たちが話したり、書いたり、読ん

だり、聞いたりする、そういう暮らしの中の普通の言葉、国語についていろいろな角度から研究する機関として仕事を続けております。具体的な仕事の内容は、お手元にお配りした緑色の薄いパンフレットを御覧いただきたいと思います。例えば、日本中の方言を調べまして大きな地図に書いたりします。あるいは、学校や会社の中で敬語というものが実際にどんなふうに使われているのだろう。上司・部下の間、先輩・後輩の間でどんなふうに使われているのだろう。そういったことを実際に学校や会社に入らせていただいて、録音をしたり、インタビューをしたりする、そんな仕事をしております。国民の皆さんの普段の言葉をきちんと見つめる、きちんと把握する、そういったところから、その言葉に何か問題はないだろうか、今後国語はどんな方向にいったらいいのか、といったことを提案するような、そのための基礎的な研究を続けている場所でもあります。今日のこの「ことば」フォーラム、フォーラムはカタカナ言葉で恐縮なのですが、広場といったような、そんな意味の言葉です。私ども国立国語研究所が毎年2度、3度くらいのペースで続けてきておりまして、今日で34回。日本語について、その時々テーマを選びまして、言葉の研究あるいは教育の専門家だけでなく、いろいろなお仕事の方の方にもお聞きいただいて、言葉について皆さんと一緒に考える、そんな時間を過ごしていただけるようにと企画して続けてきているものです。今日は、御覧のとおり「敬語と方言—ふるさとのことば」と副題を付けてましてテーマにしました。のちほど、私も少しお話を申し上げますが、敬語も方言も、私たちの暮らしにとっては切っても切れない非常に縁の深い、言葉の中でも特別に大切なものだと思います。私たちは毎日いろいろな人と会って暮らしています。家族や近所の人、あるいは学校や職場の人、買い物先のお店の人、通りがかりの見知らぬ人、いろいろな人と触れ合います。そういうときに必ず言葉が間を仲立ちしてくれています。その仲立ちをする言葉の中でも今日のテーマの敬語と方言は、特に大切な働きをするものだと思います。相手が例えば御近所の年上の方であったり、あるいは職場の上司であったり、そういうときは敬語が欠かせない。逆に、気の置けない家族、あるいは親しい友達を相手に話すときであれば、敬語はむしろ邪魔になることが多いだろうと思います。そこではざっくばらんな方言、気楽に話す言葉遣いがむしろ自然です。その気楽な普段の言葉、生まれ育った土地の言葉、つまり方言、御当地であれば岡崎の言葉がごくごく自然に口をついて出ているはずです。そんなふうに毎日の暮らしにとって切っても切れない言葉の、一方には敬語がある、もう一方に方言がある、その

二つを今日は併せて考えてみようという、そんなテーマです。2時間ほどの間ですけれども、普段そういった意味で暮らしの中で大切な方言と言葉について、ちょっとだけ立ち止まって、皆さん方一人一人の御自分の言葉、周りの方たちの言葉を考えるお時間を過ごしていただければと思っております。長くなりました。今日は、この催しのために二人の講師をお願いしております。お一人は、NHKのアナウンサー 梅津正樹さんです。梅津さんというより、どうでしょうか、“ことばおじさん”と御紹介したほうがお分かりいただきやすいかと思えます。おなじみの方です。もうお一人は、パソコンのインターネット関係のヤフー・ジャパンという会社がありますが、そこで仕事をされていて、特に最近は方言に関係するお仕事を進められた方です、岡崎市出身の方で阿南^{あなみめぐみ}愛さんとおっしゃいます。岡崎高校の御出身だそうであります。お二人にはお忙しい中御協力いただきまして、それぞれのお仕事の御経験の中から、今日のテーマ「敬語と方言」についての興味深いお話をお聞かせいただき、そして座談にも加わっていただきます。ありがとうございます。よろしく願いいたします。今日の催しはパンフレットに書いてございますとおり、岡崎市・岡崎市教育委員会、そしてNHK名古屋放送局・中日新聞社・東海愛知新聞社、から御後援をいただいて催しております。ありがたいことだと特にお礼申し上げます。先ほどは、岡崎市役所から石川優副市長にも丁寧な御挨拶をいただきました。お忙しい中、ありがとうございました。この場をお借りして、ここにお集まりいただいた皆さんにお礼を申し上げます。短い時間ではありますけれども、御来場いただいた皆様方がそれぞれに、繰り返しくなりませんが、普通の御自身の言葉、あるいは周りの皆さんの言葉、それを敬語あるいは方言という角度から今日はしばらく考えていただく時間を過ごしていただければと願っております。物としておみやげの準備はできませんが、何か手掛かりをおみやげにお帰りいただければと願っております。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

(拍手)

司会 これよりフォーラムをはじめますが、ここで岡崎市副市長の石川優様は御公務のため退席されると伺っております。今日はお忙しいところありがとうございました。

(拍手)

<副市長退席>

では、始めたく思います。まず最初は、手元にございますプログラムに従ってまいります。国立国語研究所所長の杉戸より敬語について講演いたします。

「敬語について」杉戸 清樹

(配布資料 : p. 1 ~ 2)

杉戸 あらためて、所長を務めています杉戸と申します。残念ながら三河でなくて名古屋の出身でありまして、その名古屋の尾張の言葉と、この岡崎の三河の言葉を少しずつ実例に出しながら、今日のテーマの方言の敬語ということ、あとのお二方の座談に向けての準備になるような、そんなつもりでお話をしばらくお聞きいただきたいと思っております。お手元の資料の3枚目にページ1、4枚目に2と書いたページを準備しております。「方言の中の敬語」という題を付けております。それを時々御覧いただきながら、話を進めてまいります。今日の総合のテーマは、ここに書いてありますように「敬語と方言—ふるさとのことば—」。先ほど最初の挨拶でも申しましたけれども、方言といい、敬語といい、暮らしにとっては欠くことのできない言葉として大切なものだと思います。このことを考える方言や敬語という言葉から、皆さんそれぞれいろいろなことを思い出されると思いますが、私にとって例えば忘れられない方言あるいは方言の敬語を、いきなりですけれども、遠く離れた山口県の例と富山県の例を書いておきました。①が山口県萩市、長州萩です。私はバス停で一人ボーッとバスを待っていたのです。そうしたら、その土地の方だろうと思われる私より年上の男性が近寄ってきて、「いま何時でありますか？」と質問されました。私は言葉に興味を持っております、方言にも興味を持っておりますので、非常にうれしく思ったのです。これは長州弁です。普通と言いましょか、全国共通語、私の名古屋でも岡崎でもそうだと思いますが、「何時でしょうか?」「何時ですか?」と聞くのが、「何時でありますか?」。うまくイントネーションのまねができないのですが、「何時でありますか?」というような感じ。思い出したのはテレビドラマです。明治維新の高杉晋作とか大村益次郎、長州出身の人がふるさとの言葉をしゃべると「～であります」。これです。これが現代にも生きている。そして、その「ます」の部分は敬語なのですね。二つ目が富山県八尾です。風の盆という胡弓や笛の音に合わせる盆踊りで有名な町ですが、そこに行っていたときに、30歳くらいのお父さんが、本当は静かにしていなければいけないところなのにはしゃぎ回る自分の6、7歳の男の子に向かって、「黙られよ」「そこに座られよ」と、たしなめるというのか注意しているわけです。この「黙られ」の「れ」の部分、「座られ」の「れ」の部分、これは細かく分析していきますと紛れもない尊敬語です。これは八尾だけではなくて、富山県あるいは北陸のほうには、身内に向かっても使えるような非常に親しみを込めた尊敬の表現があると言います。それが

また「黙られ」などというとはやはり時代劇の世界で、私にはお侍さんが言うような言葉として聞こえます。非常に不思議な感覚がしたことを覚えております。例えばこういうものです。「何時でありますか?」「黙られよ」、これは方言の中の敬語。つまり敬語と言いますと、先ほどの挨拶の中では方言と対比されるものとして申しましたけれども、決して全国の標準語の中にだけあるものでなくて、方言の中にも方言の敬語として生き生きとしたものがあるという、そういうことを申し上げたくて例を出しました。2番の愛知県でもというところに入っていきますが、最初に申しましたように、私は名古屋の出身です。25歳まで名古屋で育ちました。尾張の人間です。一方こちらは岡崎、オカザキと言ってはいけないのだと、先だって市役所で教えていただきました。(笑)名古屋人が名古屋の感覚で岡崎のことを言うとオカザキなのですね。それは岡崎の方にも許していただけると思うのですが、東京で暮らしているとオカザキと言ってしまふ。それもあとでちょっと話題にしますが。その尾張と三河を身近な例として申し上げます。敬語よりも方言のほうの目立つ対比として、三河のほうで「行カマイ」あるいは「書カマイ」。一緒にやろうとか、誘うようなときですね。あるいは「ソーダラー」という「ダラー」、これはもう全国的に有名な三河の方言です。私も友人に岡崎とか豊橋出身の者がいますので、「書カマイ」とか「ソーダラー」と聞くと、その友達の顔がフツと思ひ浮かぶわけです。一方、同じ意味で尾張地方には、微妙な差ですけれど、「行コマイ」「書コマイ」「ソーダロー」というのがあります。「カ」と「コ」の違いで同じ意味なのですけれども違ふ。名古屋で暮らしていたとき、「行コマイ」と言うと「あっ、これは近所の人だ」、「この意味で行カマイと言っている。これはひょっとしたら知立よりこっちのほうかな」という感じがするくらい、「カ」と「コ」の違いだけなのですけれども、目立つ差でありました。「ソーダラー」と「ソーダロー」もそうです。「ダラー」のほうは岡崎の観光協会の大きなポスターが、今あちこちに張ってあります。これも、うまくイントネーションがまねできないかもしれませぬ。お許してください。「やっぱ岡崎だらあ」、「やっぱ」は大きな平仮名、岡崎は漢字、そして「だらあ」と平仮名で書いてあります。それがつまり土地の言葉として観光ポスターに使われている。そういったことは、まだ元気に生き生きと三河の方言が生きているということだと思ひます。アクセントの話、先ほど「オカザキと言ってはいけない、オカザキと言うんだと言われたこともある」と言いましたが、岡崎でシロナル。白くなる、色が変わるということですね。これは名古屋だとシロナルと言うのですね。

シロナルとシロナルです。これも微妙な音の高低差ですけれども、私など尾張の人間からすると、シロナルと言わずシロナルと言っていると「ああ、これは三河の人かな」と感じる非常に大きな差です。こういう方言の中に、方言の敬語もやはり三河と尾張で違うということがあります。2の(2)の①が三河(岡崎)の方言敬語でして、これは、方言の研究の書物ですとか、私どもの国語研究所の調査によって得られている全国の方言地図の中から、目立つものを書き出しました。書く：オカキル(お書きになる)、オカキタ(お書きになった)、オカキマショウ(お書きになってください)。もう、今のこの瞬間でちょっと言葉の調査ができたような気持ちになっております。うなずかれている方は年齢の高い方、きょとんとしている方は若い方のように瞬間的にみえました。これは本当にそうだったので、うれしくなっているのですが。この「オカキル」「オカキタ」、あるいは「オイキル」「オイキタ」「オミルル」「オミリタ」、これはやはり尊敬の言い方で、岡崎を中心にした三河の言葉としてまだまだ元気に使われていると聞きますが、しかし町中^{なか}では減ってきている、周辺部に行かないと聞かれない。そういうようなことも、最近やっている今回の調査に向けた事前の準備段階でだんだん分かってきていることでもあります。NHKドラマで『純情きらり』がありました。あの中にも「書いてみりん」とかいうのが飛び出していました。あれは戦前の話でしたから、その時代はそうだったのでしょう。若い人もしゃべっていました。今はさてどうか。そういったところが今日のお話の締めくくりにも出てまいりますが、知りたいところです。それから、「～シテオイデル」。オイデルですか、オイデルですか。アクセントはどちらでしょうか。それがちょっと音が縮まって「～シトイデル」。「起キトイデル」とか「食ベトイデル」。これも、三河(岡崎)の言葉として非常にいろいろな場面に共通して使える、硬い言葉ですけれど、汎用性^{はんよう}の高い、起きるにも、食べるにも、寝るにも、なんにでも使える尊敬の表現です。これらが今どんなふうに使われているのか知りたいと思います。念のためにですけれど、名古屋のことも2ページのほうに書きました。同じような意味で形はずいぶん変わります。「書カッセル」「書キヤース」。(笑)「書キヤース」の「ア」の部分を一言ちょっと発音してくださいと言えば、もうだいたい本当の名古屋人かそうでないか私は分かります。私でなくても名古屋の人間が聞けば、これはよその人がちょっと無理やりやっているなと思ったりします。非常に難しい。「行カッセル」「行キヤース」。三河地方の「オイデル」がいろいろな場合に使える尊敬の言い方だと言いました。名古屋にも、やはり同じよ

うな「ミエル」というのがあります。行く・来る・どこそこにいるという、いろいろな意味で「ミエル」が使えます。東京では「来る」、先生がこちらにいらっしゃるという意味で「ミエル」、そのときだけしか使えないわけですが、名古屋ではなんでも「ミエル」と言えばいいのです。さらに、先生が字を書いているときも「書ヤーテミエル」、これでいいのです。(笑)先生は今日は東京に行っている、
「行ッテミエル」でいいのです。テレビを見ている、
「見テミエル」でいいのです。大丈夫なのです。きちんとした尊敬の気持ちを込めた言い方です。そのほかにも、「ラッセル」とか「テゴザル」という尊敬の言い方があります。「書ヤートラッセル」「行ットラッセル」「書ヤーテゴザル」「行ッテゴザル」「見テゴザル」。そういういろいろな場合に共通して使える尊敬の言い方に「ミエル」があるというお話。これは三河の「オイデル」と比べられます。こういうのが今日お話する方言敬語の重なる部分ですね。方言の中にも敬語があるという、そういうところを今2番で例としてお示ししました。だんだんもう時間がなくなってきておりますけれども、2ページの3番に進みます。さて、そのような方言敬語、先ほどの「オカキル」とか「オミリル」とか、それは今岡崎でどう使われているのか、どれくらいどんな人に使われているのか、それを知りたいと申しました。そのことを3に書きました。方言敬語は、共通語敬語に比べれば、敬語とはいえ非常に身近な感覚の持てる言葉だと思います。共通語がよそゆきだとすれば、方言のほうは普段の言葉、しかし敬語である。そういうものなのです。例えば方言敬語でないと困ることがあるという、そんなことも時々思います。共通語の敬語を使っているだけではその場の言葉として不適當だ、まずいのではないかと思うことがある、ということの一つの例として考えてみたのが(1)であります。私の場合、もう名古屋を離れて東京で暮らして30年を超えました。例えば帰省したとき、その土地で暮らし続けている私より年上の人とちょっと改まって話さなければいけない冠婚葬祭のようなときに、共通語の東京のほうの言葉遣い、特に敬語を使っていると、本当に居心地が悪くなるのです。この場に本当にふさわしくないなあと、いくら丁寧な言葉を使ってもまずい。やはり名古屋風の方言のきちんとした敬語を使うべきだと思います。つまり方言敬語は、そういった特殊な場合ではなく、日常生活の中でも求められる必要な場面が今はあるという、そういうことだと思います。ほかにもいろいろな場面があると思います。方言敬語はどんなふうに使われているか、どんな働きをするものかということ、今日のこの機会をきっかけに、皆

さん方に一つの問いとして時々お考えいただくことをお願いしたいと思います。どんなことが分からないか、知りたいかというのを3の(2)の①②③に書きました。早口になりますが、① 方言敬語はどんなときに、どんな場面で、どんな相手に使われるか。方言を使うか、共通語を使うか、その使い分けはどうか。② 方言敬語と共通語敬語を比べて、どちらが丁寧か、どちらが改まっているか、あるいはどちらがざつぱらんか、気楽か。これも一概に方言のほうが気楽でしょうと言えないことがあるかと私は思います。その都度、その都度考えてみると、この場合は方言敬語でないといけない、方言敬語のほうが改まった言葉として働く、そういうことが先ほどの冠婚葬祭のようなときはあると私は思います。③ 時間を経て、年月を経て、方言敬語は今どうなっているのか。使われなくなったというけれども、本当にそうなのか。どこで使われる、どこで使われなくなったのか。これも一概には言えないこと。これから先どうなるか。これも知りたいところです。いろいろ書きましたけれども、分からないこと、知りたいことがいっぱいあります。そして、それは何も方言研究の専門家たちだけにしか分からない問題ではないと私は思います。一人一人の暮らしの中に、この問い掛けがすべて起きています。どんなときに方言敬語を使うか、共通語敬語を使うかという使い分け、それは普段の暮らしの中で絶えず起きています。ちょっと押しつけがましいのですが、皆さん方お一人お一人の暮らしの中で、それをふと考える時間を持っていただくと、今日のテーマを暮らしの中で考えていただけることにつながると思います。お勧めしたいと思っています。最後に付け足しのようになっていますが、しかしそうはいうものの、全国でどういう方言が使われる状況があるのか、どんなふうになっているのかはきちんと押さえなければいけません。国語研究所の役割はそこにあると思いますので、それが4番の話につながります。今、3の(2)の①、どんなときに敬語が使われるか、方言が使われるか、そういった問い掛けをお一人お一人の問題だと言いましたけれども、それを研究の専門の世界でも考えていきたいと思っています。その一つの調査の姿が、先ほど副市長さんからも御紹介いただきましたけれども、国語研究所は、55年前の昭和28年に1回目、今から36年前の昭和47年に2回目、それから来月、平成20年に3回目を企画しております。これは、本当に大げさでないですけども、世界で1カ所だけ岡崎だけで実現できるもの、50年間を経た継続の調査ですが、同じ質問を、同じ回答者にする。その方の言葉遣いが20年、あるいは50年たって変わったか、変わらないかを追いかけることができる、そ

ういう調査です。暮らしの中の言葉遣い、お家の中で家族同士で敬語を使いますか、使いませんかといった調査を 60 年前からしています。今度もしようとしています。近所のお店で買い物をするとき、どんな言葉を使いますか。通りがかりの人に道を尋ねるとき、どんなふうに尋ねますか。そのような質問をいくつかします。ひょっとしたらここに調査員が何う相手がいらっしゃるかもしれないから、あらかじめ質問を申し上げてしまうと、来月まで考え込んでしまわれて、回答が変わることを心配して別の例で申し上げておりますが、そのような質問をします。つまり暮らしの中のいろいろな言葉遣いが知りたい。そして、その実際の変化の姿、あるいは変わっていない姿を追い掛け続けたいという、そういう願いの調査であります。30 人近い調査員が調査票やテープレコーダーを持ってお訪ねします。町を歩き回ります。もしそれらしいのを見掛けても不審な者だと思わずに、そして郵便で「伺います」とあらかじめお願いしますので、もしその郵便がまいりましたら、断らずに御協力いただきたいと存じます。ここでお願いもしてしまいましたが、それをまとめといたしまして、方言と敬語を区別することも必要なのですが、方言の中の敬語というふうに重ね合わせて、それが今それぞれのお一人お一人の暮らしの中でどうであるか、それを考えるきっかけに今日の時間を過ごしていただければという繰り返しのお願いを申し上げて、最初のお話といたします。ありがとうございました。（拍手）

司会 それでは、これより 10 分間の休憩といたします。10 分間と申したのですが、できれば前にある時計が 2 時 45 分になったころには始めたいと思っておりますので、そのときまでにぜひお戻りください。事務的な連絡が 2 点ございます。まず 1 点目ですが、黄色の用紙、「ことば」フォーラムのアンケートがございます。もしこの時間でお帰りになる方、ぜひ御回答のうえ、提出してお帰りください。御協力よろしく願いいたします。もう 1 点ですが、この部屋のいちばん後ろの所に国語研究所の刊行物をいくつか展示しております。休憩の時間に一度手に取って御覧になってください。では、休憩にいたします。

<休憩>

司会 そろそろ時間でございますので、後半の部を開始したいと思います。後半は、本日のプログラムにもありますように、トークショーとなっております。トークショーの司会は国語研究所の杉戸が担当いたしますので、マイクを渡します。

【トークショー】敬語と方言について

杉戸 後半の司会を務めます。国語研究所は、やたら難しい外来語は使うまいということも提案したりしております。それなのにトークショーなどというカタカナ言葉で恐縮なのですが、いわば見て聞いていただく座談会という意味でトークショー、お許してください。座談会だけですと、我々4人だけがどこかの部屋で話せば座談会、皆さんの前ですからトークのショーであります。(笑) さて、3人の方に着席していただいております。今日のテーマ「敬語と方言」について、座談につながるようなお話をまずはお二方から15分間くらいしていただいで進めていくという、そんな計画をしております。改めて紹介いたします。上手^{かみて}のほうから順番にまいります。より詳しくはお手元の資料の2枚目にプロフィール紹介の欄がございますので、御覧ください。上手のほうから、NHKエグゼクティブアナウンサー、またの名を“ことばおじさん”，梅津正樹さんであります。お二人目が、インターネット関係の会社ヤフー・ジャパンでプロデューサーをお務めで、方言の情報発信などのお仕事もなされています、岡崎出身の阿南愛さんです。3人目は、国立国語研究所の研究所員であります井上文子と申します。言葉の研究の中でも方言、全国を歩き回ったり録音した言葉をきちんと文字に直して資料としてまとめる、そういった仕事を続けてきております。大阪府出身の者です。司会は私が務めてまいります。最初に梅津さんから15分、それから阿南さんから15分くらい、それぞれお話を改めて伺います。お願いいたします。そして、それを受けて、またこのように席を戻しまして座談を進めていく、こんな予定にしております。最初をお願いするのは梅津正樹さんです。アナウンサーとしてのお仕事の中で言葉、特に今日のテーマである方言と敬語をめぐっていろいろな話題を出していただけると伺っております。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

「「ことば」フォーラム岡崎 話題提供」梅津 正樹 (配布資料：p. 3)

梅津 こんにちは、梅津でございます。よろしくお願ひいたします。私は、国立国語研究所が誕生した昭和23年に生まれておりますので、同じ60歳ということになります。この研究所が岡崎で2回目の調査をした昭和47年にNHKにアナウンサーとして入りました。36年がたちました。今月の1日が誕生日だったものですから、退職を一応正式にはしております。引き続き番組がありますので、契約をして1年ごとに嘱託のような形で仕事しております。私が今担当しております番組は「ことば」の番組です。

6年目に入りました。おかげさまで700回を超えまして、皆さんからいただくいろいろな手紙、ハガキ、それからファクシミリ、メール、1万7000通を超えております。全部取ってあります。仕分けして全部取ってあります。しかも、ちゃんと鍵のかかる棚にしまうのです。皆さんから住所も書いていただきます、年齢も書いていただきますので、個人情報保護の中でほかに漏れないように管理しながら、きちんと整理して保管しております。ですから、それを時々番組で御紹介します。どこどこにお住まいのなんとかさんがこういう御質問です。見ると2004年だったりするのですね。そのときに86歳の方、「あー、もっと早く御紹介できればよかったな」と、たぶん元気でいられるだろうと思って期待を込めて御紹介するのです。とにかく皆さんからたくさんいろいろな言葉にまつわる御質問・御意見をいただいているのですが、5年前と比べると少しその内容が変わってきたなと思います。番組が始まった当初はとにかく、「何月何日何時のあの放送でなんというアナウンサーがどう間違った。謝れ、訂正しろ。謝らないと受信料払わないぞ」という苦情です。そういう他人の粗探しが多かったのです。今は違ってきて、皆様から「こういう言葉、こういう表現はどうなんだろうね」という御質問や御意見をいただくようになりました。私はいい傾向だなと思います。皆さんが単に言葉に関心があるというだけではなくて、だから今、言葉がどういう方向にいけばいいのか、ということをお考えになっているのだなあと私は思うのです。ただ、皆さんの御意見をずーっと1万7000通見ていると、ある傾向があるのですが、言ってみれば、皆さんは御自分が今まで使ってきた言葉は正しいという前提でNHKに意見を言っていらっしゃいます。(笑)それは当たり前なのですよね。つまり、皆さんは御自分が生まれて今日までお使いになっている言葉で暮らしてきて、なんの不都合もないのですから、それは当然正しいのだろうというふうにお思いになって、それと違う言葉遣いや表現が耳に入ってくると、「これはおかしい。またあのアナウンサーが間違えたに違いない」、こう思って投書をNHKに書いてくださるということだろうと思うのです。全部にお答えできないので折を見て番組で紹介していくわけですが、時々やり取りがあつて、「なぜ、これが間違いとおっしゃるのですか」と伺うと、「本来はこうである」と皆さんはおっしゃる。「本来っていつですか」、すると、ちょっと詰まってしまうのですが。要は、やはり皆さんが生まれて今日までの、どちらかというと昭和を中心にした時代を本来とおっしゃっているのかなあと思うのですね。よく言いますよね。言葉は時代とともに変わると申し上げると、「そうじ

やない。おまえたちが放送で間違えるから変わっちゃうんだ」と言われます。例えば「結構」という言葉がありますが、「今日、帰りに一杯いこうか」と言われて「結構ですわね」と言うのと、「もう一軒どうだ」「いや結構です」と言うのと違うのですよね。「結構って本来どういう意味ですか」と伺うと、皆さん「良いと悪い」とおっしゃるのですけれど、本来は建築する、建物を建てるという意味なのです。(会場から「ふーん」という声あり)「ふーん」でしょ？(笑)「ふーん」と言っていただけで、本当にもうホッとすると、内心紹介してよかったなあと。それが長い年月の間に時代とともに変わってきた。でも皆さんは、そんな建築するとか、やがてその「結構」は準備するという意味に変わるのですが、そんな時代のことはご存じないから、今、つまり明治以降の「結構」をご存じだから、それが本来の「結構」だろうとお思いになって、それを基準になさっているというふうに思うのです。最近、皆さんが言葉について関心を持ってNHKの番組にも投書をくださるのはなぜかと思うと、私は二つ理由があると思います。一つは、言葉を取り巻く環境が変わってきた。つまりもっと分かりやすく言えば、そういう言葉の変化が、平安時代から徐々に江戸、明治、昭和、平成と変わってくる言葉もあれば、この平成になってガラガラガラガラ変わる言葉もありますよね。その変わりようの変化が激しいということと、たまたま皆さんは変化の時期に出くわして、その変化を耳にする機会が多いのかなと思うのです。それはテレビ・ラジオの影響もあると思います。無い時代は言葉の変化は長い年月をかけて徐々に徐々に広がっていったものが、今はあっという間に伝わってしまうので、「あれ、昨日と違うじゃないか」ということになるのが一つかなと思います。もう一つは、価値観が変わってきた、多様化してきた。つまりこの会場にいらっしゃる皆さんの価値観は、例えばここに100人いらっしゃれば、100通りの価値観があると私は思います。その価値観が違うということ、最近我々は知るようになった。日本は昔から、「じゃあ昔っていつ？」ということなのですが、聖徳太子の時代から「和をもって尊しとなす」、みんな私たちは同じ、一緒、ほかの人と自分だけが違うのはなんかいけないのではないか、という思いが今でもきっとどこかにあると思うのです。みんな助け合って察し合っていこうよ、という気持ちが日本人にはあると思うのですね。その気持ちでもって言葉も使ってきた。だから、「人と価値観が違う。あれ、まずいかな。ここでそれは違うって言わないほうがいいかな」と、遠慮する気持ち、謙虚な気持ちをみんな持っていたのですが、最近はそのではなくて、一人一人が違うことがいいことだというような価値

価値観が生まれていますよね。例えば「こだわる」という言葉がありますが、これこそ本来はどうでもいいことに執着するというような意味で、あまりいい意味では使われていなかったのに、最近テレビを見ますと、「このラーメンは材料にこだわっている」と、いい意味で使いますよね。これは 1970 年代からいい意味で使われるようになっていきます。私が 1970 年代に全国放送のテレビで「こだわりの京都」という番組を作ったら、「その使い方は違う」と投書がバンバンきました。今、テレビで材料にこだわっていると云ったって誰も投書しない。定着してしまったのですね。わずか 30 年の間に、いい意味で使われるようになった。悪い意味がいい意味で使われるのはほかにもありまして、「やばい」。何か食べていて私たちが「やばいね」と言うと、なんかまた農薬が入っていたのか、どこから輸入したのだ、みたいに思いますよね。若い人は、食べていて「やばい、これ。やばくない？」と言うんですね。これは「おいしいね」という意味です。そうなのですよ。(笑) まるで違う。なぜか。私たちは、物がおかしい、変だという意味で「やばい」と言う。若い人は、それがあまりにもおいしすぎて自分の心がどうにかなってしまう、とりこになってしまう、自分の心が変になってしまうという意味で「やばい」をいい意味で使う。そのように言葉がもう平成になっても変わっている。その変化が激しいということと、価値観がそれぞれ違うということ。つまり、私たちが子供のころは、物があまりありませんでしたので、食べ物を食べれば「おいしい」か「まずい」かのどちらか、二者択一だったのが、今はそうではない。もっと間に「普通においしい」という言い方もあるくらいですから。「普通においしい」あるいは「おいしくない?」。もっと分からない「おいしくなくない?」。なんだか分からない。(笑)「おいしい」だけでは言い切れないものを、「やばくない?」「やばいね、これ」で、もっとおいしいということを知りたい。そういう価値観がどんどん広がっているということもあるのではないかなと思うのです。さて、こうしてお話をしていると、私は今「やばくない?」と言いましたけれども、あるいは「おいしくなくない?」と言いましたけれど、これは活字で書くと意味が分からないのですよね。つまり、私たちが今、言葉、言葉と言っているのは、書き言葉ではなくて話し言葉ですよ。私よりも先輩の皆さんは、言葉の規範を書き言葉で考えていらっしゃる方が多いと思うのです。ですから、御意見をいただいても、本来こうだというのは、書き言葉をお手本にして、それを規範にして、書き言葉はこうなのだから話し言葉もこうあるべきというふうにお思いの方が多いたと思いますが、やはり書き言葉と話し言葉は違

うのだろうな。私、よく分かりませんが、例えば手紙を書くときに、方言をそのまま書きますかということですよね。目上の人に対して方言で手紙を書く、あまり書かないのではないかな。最近、メールだと若い人たちは方言で打ちますけれども、そんなことはないのかなあと思うのですね。日本人はそうして、話し言葉と書き言葉は別々のだけけれども、なぜか今までは書き言葉を規範にしていた。それが今、やはり皆さんは「いや、話し言葉はどうなんだ」というところまで気が付いていらっしゃる。察し合うことも、価値観が違うから、なかなか難しい時代になりましたよね。今まではうまく察し合ってきたのですよね。例えば「いい加減」という言葉がありますが、風呂に入っていて「この湯はいい加減だ」と言うのと、「なんだこの手紙いい加減だな」。「良い加減」と「いい加減」と二つあります。これも字で書いたら、いいか悪いか、どっちだか分かりません。人と顔を合わせて、その言葉を耳で聞いて判断していました。「良い加減」か「いい加減」か、いいか悪いか判断できたのですよ。あるいは「適当」という言葉がありますが、大学の試験で括弧の中に適当な言葉を選んで書けというと、めちゃくちゃ書いている学生はバツです。「なんでですか、先生。適当に書けと言ったから、いい加減に書いた。バツはおかしい」と言った。それこそいい加減に書いたのですね。適当には二つ意味がありますよね。「ふさわしい」と「いい加減」という意味。どちらを選ぶかは、お互いに察し合ってきたのに、最近価値観が違うとなかなか察し合うことができなくなっている、ということがいえると思うのですね。私たちはなるべく話し言葉で放送をお伝えすることを基本にしていますから、書き言葉ではない。例えば「本日」という言葉を使わずに「今日」と使おうとか、そういう基本的ことから始まって、なるべく皆さんが普段お使いの言葉を使おうと。ただ問題なのは、私たちは全国に一瞬にして放送が流れますので共通語を使うと言っているわけですね。共通語とは何かというと、全国の皆さんに瞬時に理解していただける言葉を使おう。結局、無理なのですよね。何が無理かって、明治になって標準語をつくった、東京の言葉を基本にして全国の平均的な言葉をつくった、それでやっていますから非常に心がこもりにくい。だから、NHKのアナウンサーは暗い、ダサイ、堅いと言われるわけですよね。もっと人間的に何かできないかなと思うときに、今、もっともっと方言を見直そうということも考えています。時間がないので最後に、私、大学でも教えていて、学生に敬語についてかなりやるのですが、「敬語の授業は必要か」と聞くのです。みんな必要だと言います。99%の学生がやってくれと言います。「だけど、

これからの時代もういらなくなるんじゃないの」と言ったら、「いります」と。知りたいと。「なぜ？」と聞くと、「社会に出てから人間関係をうまくやっていくには敬語が必要なんです」と学生が言うのです。教えます。試験をやります。平均点は 50 点以下です。

(笑) 敬語は難しいですね。もう一つ、今、若い人たちは方言に興味を持っています。私は半信半疑で、しばらく前に沖縄の方言の歌がいろいろはやって沖縄の人がスターになったから、みんなそれにあこがれているのかなと思ったらそうではなくて、どうやら若い人たちも、本当の自分の気持ちを表すためには、共通語、いわゆる東京弁などを使っていたって表現しきれない部分があるのだと最近気付いてきた。もう一度自分たちが生まれ育った土地の言葉を見直してみたら、「あっ、このほうが自分の気持ちを素直に表現できるんだ」と気が付いてきて、今、若い人たちが方言をいろいろな形で使おうとしています。その傾向を私の番組の中でも取り上げて、近々放送しようと思っております。また、詳しいことは後ほど時間があればお話ししようと思います。

最後に、皆さん、『新「ことば」シリーズ 21 私たちと敬語』が今日封筒に入っていたのですよね。これはお勧めです。これはいいです。本当のことを言うと、私も番組ではこれを参考にしています。(笑) 特に巻末資料に分かりやすく書いてくれているのです。これを読めば敬語の達人になれます。もう疑問がなくなります。そうすると、敬語についてNHKに質問する必要がなくなります。(笑) 私は助かります。ありがとうございました。(拍手)

杉戸 最後は国語研究所の本の宣伝までしてくださいまして、ありがとうございました。しかしお話の中身は、アナウンサーとしての、そして投書をいろいろな角度から見つめたお話で参考になりました。私などにもありがたいお話でした。どうもありがとうございました。では次に、ヤフーの阿南さんをお願いいたします。お仕事の一つとして、インターネットの世界で方言地図を出して、そしてそれを利用する全国の人たちに方言地図の内容をどんどん増やしていってもらい、そんなシステムのこと仕事として手掛けられました。そういうお話を具体的な地図を画面に示しながら伺っていると聞いております。それでは阿南さん、どうぞよろしくをお願いいたします。(拍手)

「みんなの投稿で方言分布図作成」阿南 愛 (配布資料 : p. 4)

阿南 こんにちは。プロのあとに話すのは私など素人なのでたいへんどキドキするのですが、よろしくをお願いいたします。私は岡崎市北部の細川町という所の出身です。小中

学校の有名人では大関の琴光喜関がいらっしゃるしまして、私は琴光喜関の二つ先輩にあたります。なので、小中学校のときの年の差は絶対ですから、琴光喜関のことを呼び捨てしても怒られない地位に立っています（笑）。インターネットを使ってみえる方はどれぐらいいらっしゃるのですか。（参加者の3割くらい）分かりました（笑）。方言調査は対面で一人一人口頭で、とても手間暇を掛けて大事に大事に調査されるものなのですが、これをネット上でつなぎまして、ワンクリックで「うちの方言はこうなんだよ」とか「うちの言い方はこうなんだよ」というのを集める集積システムを作りました。ですので、今回はその御報告をさせていただきたいと思っています。こちらの画面は、2008年の4月から6月なのですが、方言の分布図を全国の一般の方々に投稿していただいた地図です。これはなんという言葉について調べているのかというと、「アホ」とか「バカ」とか「タワケ」とか、先生方が絶対に調べないような言葉についてインターネット上で調査しました。昔、『探偵！ナイトスクープ』という番組がありまして、そこの方が18年前に1回調査されています。そのときはインターネットがなかったので、2000ぐらいの全国の市町村の教育委員会の方々に郵送と口頭で「あなたの地域では、アホとかバカというのはなんというんですか」と調査をされたそうです。非常にバカバカしい質問だなと一見思ってしまうのですが、教育委員会の方々は非常に面白がって、かなりの回答数が得られたと聞いています。現在は、ネット上でクリック一つで簡単に答えが出るので、実は全部で301件の「アホ」とか「バカ」とかに相当する言葉が集まりまして、投稿してくださった方々は4万214人にのぼります。なので、18年前から比べると約20倍もの皆様の意見が集積された地図がここにあります。この地図の見方は、この水色が「バカ」、赤色が「アホ」、緑色は「タワケ」ですというように単純明解です。こちらはテキストリンクとってクリックできるところがあるのですけれども、そこを押しますと、その言葉だけが浮き上がって見えます。例えば、この「トロイ」。岡崎だと「トロイ」ですよ（笑）。間違っていないですよ。「トロイ」を押してみますと、ここはモバイル接続のためインターネット環境が悪いので用意しておいた「トロイ」の分布図を示してしまっていますが、このようにやはり愛知県のアあたりが非常に濃く、今はいろいろな人がいろいろな所に住んでいますので、岡崎や三河の人たちがいろいろな所に住んでいる様子が表れます。例えば「ダラ」という言葉があって、先ほど杉戸先生もおっしゃったように、私は「ダラ」は完全に語尾に付ける言葉だと認識しているのですけれども、これを「アホ」とか「バ

カ」とかの名詞として使っている地方がある。それはどこなのだろうというのは、ここをクリックするとすぐに分かりまして、このへんですね。石川県あたりの方々は「ダラ」という言葉を「アホ」として使っているのだなと分かったりします。あと、「ホンジナシ」というのは私は 100%聞いたことがない言葉で、この調査をして初めて聞いたぐらいなのですが、どこの地域の言葉か分かりますか。やはり岡崎市民は分からないですよ。これは東北とか北海道に多く分布しているようで、「ホンジナシ」とか「ホジナシ」とか「ホデナス」とか、そのような言葉がちょっとずつ分かれながらも北海道や東北にたくさん残っていて、正直もう使われていない古い言葉ではないかな？と思ったのですけれど、これだけたくさんの方々が今でもこの言葉を使っていると投稿されています。こちらの地図は、県別にどの言葉が何票投票されたか分かるようになっています。下のほうに投稿情報の割合がありまして、これを愛知県にいたしますと、愛知県はやはり「タワケ」がいちばん多いと。名古屋は人口が多いので、名古屋の方が投稿されているのが多いからだと思うのですが、「タワケ」「トロイ」、そして標準語である「アホ」とか「バカ」が続いていることが分かります。そして、言葉の分布を古地図と併せると、ちょっと面白いことが分かります。こちらを御覧ください。これは「さつまいも」という言葉の方言分布です。赤が「サツマイモ」、黄色が「サツマ」、緑色が「イモ」です。だいたい標準語である「サツマイモ」がほとんど分布しているのですが、緑色が四つだけ見えます。これは下田と鳥羽と万座。これはすごく離れていますよね。どうやって分布したのだろうと思ったら、ここに江戸時代の航路が見えるのです。そうすると、どっちからどっちに行ったのか私は専門家ではないので分からないのですが、きっと船の積荷とともに言葉も一緒に渡っていったのではないかなというのがインターネット上から見えたりします。こちらの図は、もともとの方言の分布図は、国立国語研究所さんの『日本言語地図』からデータをいただいで作成しています。『日本言語地図』についてはたぶん後ほど井上様から詳しくお話があると思いますが、50 年前にその土地に住んでいらっしゃる生え抜きの男の人のお年を召した方に対面で調査をして、しかも全国 2400 カ所ものたくさんの地域で研究者の方々がインタビューをしたと聞いています。そのようなものすごい苦勞の末にできている資料を、今このような形で私たちはいつでも見ることができます。これ（『日本言語地図』第3集 112 図「ものもらい」）はどのように見るのかというと、こちら側に凡例があって、例えばダイダイ色の丸が「モノモライ」、緑色の丸は「インモ

ライ」，そのように表示されています。たぶん発音の正確性を期すために，このようなアルファベット表示をされています。これは，私は素人なので堂々と申し上げますが，見にくいですよ（笑）。よく分からないですよ。それをインターネット上で簡単に表しますと，このようになります。これだと，赤色の「モノモライ」は関東近辺にあるね，ピンク色の「メバチコ」はやはり関西にあるね，水色の「メイボ」はこのあたりにあるねと，すべて見えます。先ほどお見せしたとおり，ここをクリックしていけば，すべての言葉に対してどこの地域に分布しているのかが一瞬で分かってきます。インターネットというのは，今の時代の，しかも双方向であるのが最大のメリットです。だから言ってみれば，これは 60 年前の日本の方言分布図なのですけど，新しく今を生きる皆さんから投稿してもらいました。それで重ねた地図がこちらです。もともと投稿数が多い所に重ねているので違いがちょっと見にくいかもしれませんが，よく注意して見ていただくと，赤色の「モノモライ」とかピンク色の「メバチコ」とか，今でも使われている言葉がやはりちょっと増えています。このような形で昔と今を融合させて見せるのがインターネットの面白いところかなと思っています。先生方がやっていらっしゃる研究は，私も勉強して初めて思ったのですけれど，ものすごく面白いものと固めになるものがすごく多いのですが，それを自分たちが手に取る機会はすごく少ないなど。特に私はまだ 30 代の若輩者なので，研究書を読む時間も知識もないですし，そういうのをこのような誰もが簡単に手に取れるものを使って御紹介させていただくのは，お仕事として非常に面白い経験だったなあと思いますし，そのような素晴らしいデータを昔からずーっと作ってくださったことに非常に感謝しています。研究所さんのデータを使ったのは「かたつむり」とか「つらら」の方言の分布図も地図として起こしているのですけれど，もっと一般的な現代の方言ともいうべき，例えば「マクドナルドってなんていうの？」も。このへんだと「マック」だと思うのですけれど，関西の人は「マクド」と言うよねと。^{ばんそうこう}「絆創膏」も，その地域に売っているメーカーによって「カットバン」だったり「バンドエイド」だったり，いろいろ言い方が違うよねという，そういうものを調査しています。以上，ありがとうございました。

(拍手)

杉戸 阿南さん，ありがとうございました。インターネットという新しい道具を使った方言の示し方，私などもこういうやり方があるのだと改めて知りました。さて，このあとは，もう一度 4 人が壇上に戻りまして，梅津さん，阿南さんのお話を中心にして，

いろいろな角度からお話を交わしていきたいと思います。その中に研究所の井上文子さんにも加わってもらって、阿南さんのお話の中に出てきました国語研究所の方言地図の話も話の流れによって紹介できればと思っております。では、お三方、どうぞお願いいたします。さて、最初は私から少し質問を出すような形で始めてまいります。そのあとは、話のなりゆくままにというふうにしてまいりたいと思います。早速ですが、梅津さん、今、阿南さんから、インターネットを使った方言分布図のお話がいろいろな言葉の例も含めてありました。これをお聞きになっていかがでしょうか。NHKのお仕事で全国を回って、その中で御感想とか御意見はあるでしょうか。

梅津 私の番組でも、この国立国語研究所の方言地図はもう活用というか多用させていただいておまして、本当にこれは貴重なのですね。実はNHKにも放送文化研究所があって、以前はこういう調査もしていたのですが、最近できなくなりました。理由は予算がないということに尽きる。(笑) これは相当な時間とお金が必要なのですよね。私たちはだから、皆さんからいただくお便りでもって一応こういうテーマのときは、地図をなるべく使って、地図を見て印を付けて、皆さんに提示しているのですが、数が限られています。本当に少ないです。そこで国立国語研究所の地図をそのあとで御紹介して、この国立国語研究所の調査と皆さんのお便りはほぼ一致しますよねと、権威付けのためにも使っております。今、ヤフー・ジャパンの御紹介がありましたが、ああいう使い方は本当に面白いですよ。そこから皆さんが何か感じてくれるととてもいいなあと思っていますし、これからもますます期待しております。いろいろ多方面で紹介してくれるといいなあと思います。

杉戸 どうもありがとうございます。ちょうど国語研究所の中でも方言の研究グループに属して、ヤフー・ジャパンの阿南さんのお仕事で土台にいただいた、研究所が作っている方言地図の作成あるいは分析にも携わっているのが井上です。資料の5ページをお開けいただきますと、その地図がございますので、井上さんから、研究所の地図の紹介をしてください。

「方言地図」井上 文子

(配布資料 : p. 5)

井上 配布資料の最後のページ、5ページを御覧ください。国語研究所が刊行した2種類の方言地図について簡単に見ていきたいと思います。方言地図は、どういう語がどの地域で使われているかを地図上に表したものです。一つは、『日本言語地図』です。阿

南さんがインターネットで使ってくださいました方言地図です。おもに単語についての方言の地図ということになります。『日本語地図』では、物の名前や生活の中で普段使う言葉について、各地の方言ではどのような語彙や発音が使われているかを、項目ごとに地図に示しています。先ほど、阿南さんが紹介してくださいましたけれども、全国の2400か所にそれぞれ調査員が訪ねて行って、その土地の人に直接「これを何と言いますか？」などと聞いて、方言を教えてもらって作った地図です。たとえば、「大きな犬が何匹もほえかかって、今にもかみつきそうになる。そんなときの感じをどんなだと言いますか。」と聞かれたら、皆さんはどのように答えますか？「オソガイ」というお声があがりましたが、協力的なお答えをありがとうございます。配布資料の「おそろしい（恐ろしい）」の地図を見ていただくと、岡崎を含めて愛知県には「オソガイ」を示す矢印のような記号が固まっています。「この地域の人はオソガイと言うんだ」と分かります。東日本には「オッカナイ」を示す縦棒の記号がいっぱい並んでいて、「東日本はオッカナイと言う人が多いんだ」とわかります。このように、方言地図は、それぞれの土地の人がどういう言葉を使っているかが分かるようになっています。もう一つは、『方言文法全国地図』です。名前のとおり、文法についての方言の地図ということになります。『方言文法全国地図』では、動詞・形容詞・形容動詞の活用、助詞の形、推量・可能などの言い方、敬語について、各地の方言ではどのような表現が使われているかを、項目ごとに地図に示しています。「東京へ行く」と言うとき、「東京サ行く」「東京ニいく」「東京へ行く」など、どこでどんな助詞を使っているのかという感じです。たとえば、『雨が降っているから行くのはやめろ』と言うときの『雨が降っているからやめろ』のところはどのように言いますか。」と聞かれたら、皆さんはどのように答えますか？地元の言葉に翻訳していただくような感じですね。たぶん「雨が降るとるデ行くのはやめろ」などとおっしゃる方が多いのではないのでしょうか。配布資料の「(雨が)降っているから」の地図は「から」に当たる部分を示したのですが、「デ」の茶色の記号が中部地方に固まっています。東日本の緑色の記号は、「降っているカラ」のように「カラ」を使う地域。中国・四国・九州の青い記号は、「降るとるケン」のように「ケン」の仲間を使う地域。関西を中心とした赤い記号は、「降ってるサカイ」のように「サカイ」を使う地域。このように、それぞれの語形について分布があることを見ていただけるかと思います。実は、これらの地図は、阿南さんのインターネットでの調査のように現在使われている言葉ではありません。『日本語地

図』は、約 50 年前、昭和 30 年代くらいの、その当時の年配の方々が使っていた言葉を残したものです。答えてくださった最高齢の方は、1868 年生まれ、つまり明治元年生まれの人でした。『方言文法全国地図』は昭和 50 年代くらいの、その当時の年配の方々が使っていた言葉を残したものです。過去のある時点で、どういう言葉がどの地域で使われていたか、伝統的な方言を記録した貴重な資料です。

杉戸 はい、どうもありがとうございました。いかがでしょうか。上の地図では、名古屋では「オソギヤ」となりますけれど、三河では「オソガイ」と言うのでしょうか。下のほうは「雨が降っているデ」ですね。そんなことが全国的に分かっていただける資料でありました。この地図は歴史的にかなりさかのぼった時代の図が描いてありますけれども、先ほどの阿南さんの地図は、今インターネットを使っている若い方、あるいは年配の方の答えが集まってくるという、そういう地図もこの画面の上でできると。方言の研究あるいは方言の姿をどうやって示すか、そんなお話が進められているということです。どうもありがとうございました。さて、ひとしきり方言分布図の話をしましたけれども、方言そのものについてお話を戻して、梅津さんに伺いたいのですが、アナウンサーとして各地でお勤めになったそれぞれの勤務地で、方言について何か印象深い思い出はいかがでしょうか。

梅津 私は 9 回転勤しておりまして、九州・佐賀が初任地で、続いて北海道・室蘭、広島、京都、大阪、鳥取、東京、大阪、東京と勤務しておりまして（笑）、行く先々であとになって「あー」という方言が多いのです。例えば初任地の佐賀で、取材先では何を言われても全く理解できずに、ただ笑って「ハハハ、ハハハ」とうなずいて、あとで局に帰って人に聞いて編集をするという、何を言っているのか分からないものだから、どこを編集していいかも分からないのですね。その中で印象に残っているのは、子供たちが普段遊んでいて友達の家に行くときに、「○○ちゃん、遊びましょ」と昔は言っていたのですが、佐賀の子供たちは「○○ちゃん、おんさる？」と言っていました。あっ、わかりますか。「おんさる」と聞いて、「ああ、いるってということなんだろうな」と分かったのですが、あとあとずーっと考えてみると、もしかしたらこれは敬語だったのかなあと。「あっ、子供たちは普段の暮らしの中で遊ぶときに敬語を使っているんだ」と、あとになって知ったときにたいへん感動いたしました。北海道に行くと今度は語尾に特徴があって、「いいんでないかい」と言われると、温かいなあと。北海道のイントネーションで「そうだよねえ」と言われると、「そうだよねえ」とこっちも

思ってしまった。方言って温かいなあ。広島に行きますと、「局長来ちゃった」。来ちゃいけないのかと思うのですが、広島で「～ちゃった」は「来られた」というような意味で敬語なのだあとで知るのですね。広島ではいろいろな言葉を知りました。例えば、歯が痛いときは「歯がはしる」、おなかが痛いのは「にがる」と言うのですよね。言われて意味は分かるのだけれど、「あっ、そういう言い方は自分は使っていないし、方言って分かりやすいし豊かなんだなあ」と。最近取り上げた広島弁で「たちまち」というのがあって、最近分かったのですが、つい先月放送でやりました。私が勤務していたときに、ロケ地に着いたら年上の人から「おい、たちまち飯食っとけ」と言われたのです。「たちまち飯食っとけ」、慌てて食べました。最近、私のスタッフに広島から来た人がいるので聞いたら、「えっ、それは共通語ですよ」「たちまちは共通語の急いだという意味でしょ？急いでもいいんじゃないの」「違う。たちまちとはとりあえずという意味です。これは共通語ですよ」「それは違うよ、君」。(笑)言われた本人はショックを受けて、自分は方言だと思っていた、共通語だと思っていた。慌ててその人はそれを番組に取り上げて、私にやれやれと言うのですね。さらに熊本弁の「やがて」もやってくれと。熊本弁で「やがて」は「すぐに」という意味だと。そんなことをやりましたね。調べてみると、まだまだ方言の豊かさ、奥の深さがあるなあとは私は思っています。

杉戸 ありがとうございます。飲み屋さんに入って、「なんにしますか」「とりあえずビール」。「たちまちビール」と。(笑)

梅津 本当にそう言っているのです(笑)。

杉戸 阿南さん、岡崎の御出身だということでしたが、今は東京にお勤めです。梅津さんは東京のお生まれで佐賀をはじめとして各地を勤務なさったということで、それとは逆に岡崎から東京に移動されたわけですが、どうでしょうか。岡崎に生まれ育って、その当時に使っていた言葉(岡崎の方言)と、東京での共通語での暮らし、その間の違いについて、今、若い世代としてどんなことを感じていらっしゃいますか。

阿南 私も東京でなめられたくないという一心で上京しまして、それで「じゃん・だら・りん」だけ気を付ければよかったのですよ。語尾さえ気を付けていればと思ったのですけれど。

杉戸 すみません、よそ者には分からない。「じゃんだら……」。(笑)

阿南 「じゃんだらりん」というのは、語尾に付けてしまう三河弁ですよ(笑)。

杉戸 言葉としていくつ入っているのですか。「じゃん・だら・りん」ですか。

阿南 そこさえ気を付けよう、気を付けようと思って生きていましたが、ものすごく疲れたときに「でれえれえ」と言ってしまったのですよ。(笑)何かというと、すごく……。

杉戸 分かりません。

阿南 「すごく疲れちゃった」ということなのですけど。でも、やはり一般的な人には偉い人だというふうに見えてしまうし、そのときは疲れているから態度も大きく「でれえれえ」と言ってしまうので、先輩とかにも非常に迷惑をお掛けしたことがあります。

杉戸 名古屋弁的に翻訳すると「どえりゃーえりゃー」と言うのですね。それを早く言う「でれえれえ」。

阿南 はい。

杉戸 井上さん、どうですか。方言のデータを見ている中で、今のように、例えば「たちまち」は広島では「とりあえず」という、それは標準語だと思っていらっしゃる。つまり、方言であるにもかかわらず、気付かない方言というのでしょうか、自分は共通語だと思っている。そういうことが何かありそうに思うのですけれど、何か具体的にいきなりですが。

井上 「じゃん・だら・りん」のように、共通語と違っているとすぐ方言だと気づくのですが、形が共通語と同じで意味が少し違うとか、使い方がちょっと違うとかいうようなものについては、方言だと気付かないで使っていて、誤解されたり指摘されたりすることがあるかと思います。

梅津 ただ、あれですよ。今おっしゃった気付かない方言を今回調べてみると、広島弁の「とりあえず」という意味の「たちまち」はよく聞くと、「とりあえず」という意味で使う場合には「たちまち」と「ち」を上げて言うそうです。私たちが使う「すぐに」という意味では、広島の人も共通語と同じ「たちまち」を使うのだけれども、「とりあえず」は「たちまち」。アクセントが違う。それから、熊本の「すぐに」の「やがて」も、実は調べてみると平安時代から使われている言葉で、「すぐに」という「やがて」は平安時代にあったのですよね。「とりあえず」の「たちまち」も、平安時代にそういう使い方があったのですよね。それがどうやら都（当時の京都）で使われていた。それがなぜか広島まで伝わり、広島止まりになっていたり、熊本止まりになっていたりする。ただ、実は石川県でもあるのですよね。一部の地方では残っている。これこそ、

本来は共通語だったのが、方言として今は残っていて使われているのかなあ。これは活字で書いたら分からないですね。だから、方言を使っている方は共通語と思って気付かないのは当たり前なのかなあと。平安の時代から使い続けていけば気付かないですよね（笑）。

杉戸 司会者がしゃしゃり出ますが、私も名古屋に 25～26 歳までいて、東京に出たときに、これは標準語だろうと思って使ったけれども、しかし名古屋弁だったというのが二つあります。その一つは、今日御紹介した「ミエル」という敬語なのですね。先ほど申しましたけれども、東京では「こちらへいらっしゃる」という、その意味だけは「ミエル」を使います。「先生がミエル」と。ところが、名古屋弁を全国共通語と信じて疑わなかったわけで、先生がどこかに行くという意味で「先生、東京にみえますか」。「東京にいるじゃないか。行きはしない」と。今の分かりましたか。使ってはいけない意味で「ミエル」を使って、「いや、それは違うんだ」と言われました。もう一つは、先ほど来、担当者が机を持ち上げて動かしています。名古屋弁では「机を釣る」。釣るは、持ち上げるという意味でなくて、ちょっと持ち上げて横に移動させる、運ぶという意味です。これは岡崎ではどうですか。釣るというだけで動かすという意味はないですか。言わないですか。これも名古屋人の私は全国共通だと思っていました。それで東京の暮らしの中で「その机ちょっと釣りましょう」と言ったら、全然分かってもらえなかった。（笑）そういうことを、今のお話から二つ思い出しました。おそらく岡崎の「オイデル」も、ひょっとしたら共通語の使い方と岡崎の使い方では使ってよい範囲が変わっているかもしれないと思います。これはきちんと調べたいと思って、一つのデータとしていくつか持っているのですが、また来月の調査で教えていただければと思っています。さて、先ほど梅津さんのお話の中で、方言に関する新しい番組ということがありました。ぜひ、御紹介いただけないでしょうか。

梅津 はい。これまでも方言について折りに触れて取り上げておまして、今の杉戸先生のお話の「ミエル」についても、実は 2004 年 12 月 8 日に私の番組で取り上げているのですね。そのときは「広がる名古屋弁」というテーマでした。なぜか名古屋弁が全国の若者に、特に東京の若者に愛されていると。そのときに紹介したのは、「鍵をかう」「米をかす」「まわしをする」「机を釣る」、この四つだったのですね。最近は「～してみえる」がどうも広がってきて、そのときの結論は、「ミエル」は特に西日本に広く浸透し始めて、しかもそれを使うのは学者であると。西日本で開かれる学会で「～

してみえる」が使われ始めているという報告がありまして、これは今後の国立国語研究所の調査が楽しみだなあと思いました（笑）。これからやろうとしているのは、全国のアナウンサーに呼び掛けて、今、各地で方言がどういう状況にあるのか。それを2週間ほどまとめて特集で放送したいなと思って、今は取材の最中なのですが、ある傾向が見えてきました。特に敬語の最近の傾向という側面をとらえていますので、若い人の敬語ということに特化するのですけれども、そうしますと、一つの傾向として、若い人たちが、その土地に昔から伝わる敬語ではなくて、敬語と共通語を融合させた新しい敬語を使っているという報告が多く地域からきております。例えば、土佐弁は関西弁と融合したり共通語と融合したりしています。「雨ながや」、アクセントがよく分かりませんが、これは土佐弁と関西弁が融合している。あるいは、「ええがって」は土佐弁と共通語が融合していると言われているのですね。これは語尾が共通語を取り入れて変わっているということなのです。そういうことがほかにもあります。沖縄でもそうなのですが、例えば沖縄に「頑張る」という意味の「ちばりよー」という言葉があります。これが今は「ちばる」という動詞になってしまった。若い人は「ちばる」という動詞を作って「ちばるぞー」。本来、沖縄にはこういう言い方はないのに、「～するぞー」というのは共通語ですよ、その語尾を取り入れて「ちばるぞー」と言い始めている。どうやら、沖縄の高校野球が活躍したことから、キャプテンがカメラに向かって「ちばるぞー」と言ったらいいですが、これがどうも影響したのではないか。つまり、「うちなーぐち」と「やまとーぐち」が融合しているというような報告があります。あるいは、先ほど阿南さんもおっしゃったように、私たちは「東京に行ってバカにされてたまるか」というので方言をやめる。ところが最近、方言を若い人たちが見直している。それは単に方言が面白いということではなくて、やはり方言を使わなければ自分たちの気持ちを表すことができないと。例えば山梨県の甲州弁、山梨の若い人たちが甲州弁を使った歌を作っているのですが、これがお年寄りにもうけている。なぜか。甲州弁のリズムをそのまま生かしているのです。それを歌にすると何になるか。ラップという歌なのです。ラップはご存じですよ。最近、若い人たちが……。私は嫌いなのです。（笑）あんな歌がはやるから日本語が乱れると私は思っているのです。今、若い人たちの歌は、日本語の持っているイントネーション、アクセントがめちゃくちゃですよ。つまり、曲が先にあって、あとから無理に歌詞を付けるからめちゃくちゃになるのですが、甲州弁のリズムはラップに合っているという

ことを発見して歌を作ったら、お年寄りがみんな喜んで聞いてくれる。つまり、「～ずら」がラップの「～ずら」とね。そういう動きもあります。たぶん今月下旬から来月上旬、世の中に選挙という大きな動きがなければ、御覧いただけるのではないかなと思っております。

杉戸 ありがとうございます。私も楽しみに待ちたいと思います。今、話題になった若い人たちというお話がいくつか出ました。若い人たちの間で方言の良さがいろいろな形で見直されている、再認識されているというお話だったと思うのですが、阿南さん、井上さん、どうですか。御自分の身の回りで、方言あるいは方言敬語、そういったことについて友達、同僚の間で何か感じが変わってきたのはそのほかありますか。

阿南 ごめんなさい。私は高校を卒業してすぐに東京に出てしまったので、高校生以下だと敬語を使う必要があまりなくて、常に丸出しの方言でしゃべっていただければよかったです、申し訳ないのですが、方言の敬語はあまり印象がないのです。本当に「ミエル」ぐらいしか印象がないです。

杉戸 学校の先輩筋に丁寧な言葉あるいは敬った言葉などは必要なかったですか。

阿南 必要なかったですね。(笑)

杉戸 井上さん、どうですか。

井上 私は大阪の出身なのですが、東京で暮らすようになって十数年になります。よく言われているように、関西の人間はどこへ行っても全然言葉を変えないで関西弁でしゃべる、外国に行っても騒がしいと思ったら関西弁が聞こえてきた、などと悪名高いのですが、私は、「郷に入っては郷に従え」で、東京では東京人の言葉に合わせてみようかなと思っていました。関西には、「行きハル」とか「見ハル」とかのように、「ハル」という敬語があります。今放映中のNHKの朝の連続テレビ小説で京都の人が「行かはるんどすか」などと優雅に言っていますが、同じ形の「ハル」という敬語が大阪にもあります。この「ハル」は目上の人から親しい人までかなり広い範囲の相手に使える敬語なのです。私はもう十分すぎるほど大人になってから東京に住むようになったので、関西の方言の敬語がしっかり身に染みついていた。それで、東京で敬語を使うような場面に遭遇すると、自分の方言の敬語を共通語の敬語に翻訳して使っていました。たとえば、「行きハル」は「いらっしゃる」、「見ハル」は「御覧になる」、「食べハル」「飲みハル」は「召し上がる」に変換すればいいわけです。ただ、所長とか上司とか、すごく目上の人に話しかけるときには、「明日から出張にいらっしゃ

るんですか」「今朝のニュースは御覧になりましたか」「コーヒーを召し上がりますか」でいいのですけれども、同僚に「いらっしゃるんですか」「御覧になりましたか」「召し上がりますか」などと言うと、ちょっと丁寧度が高すぎるというか、改まりすぎるというか、距離がありすぎるような印象があつて、話しかける相手によっては、共通語の敬語は非常に使いにくいという思いを強く持ちました。それに比べて、地元の方言の敬語は楽だなあ、便利だなあ、と思ったものでした。

阿南 先生、私、敬語は思い出せないのですけれど、強く命令する言葉を思い出しました。
(笑)

杉戸 やはりそういうお立場なのですね。

阿南 主に小学校のときはだいたい女子のほうがハキハキしていて立場が強いので、女性の方がウンウンうなずきましたけれど、男子に向かって「掃除しりん」とか言うのですが、それは英語で言うならばかなり強い do です。もう命令形の、即座にほうきを持たないと許さないぐらいの力を持った do。敬語と逆のことを思い出しました。(笑)

杉戸 「ミリン」の「リン」あたりは敬語の要素があります。それがそういう強い命令に使われるというようなことは非常に面白いと思いました。また名古屋を持ち出して話の腰を折ってしまいますが、最初のお話を申し上げたときの「書チャーテミエル」「書チャートラッセル」「書チャーテゴザル」、それぞれ尊敬の言い方なのですが、それが先ほどの井上さんの話と関連するかなと思います。目上の人、年配の人とか、立場が上の人に使っている尊敬語と使われない尊敬語が今の三つです。目の前にいるかいないか、話し相手であるかないか、いろいろなことが重なり合つて、目の前にいる人に「何書チャーテミエル」はちょっとおかしいのですが、「何書チャーテゴザル」ならまだいい、「何書チャートラッセル」ならもっといいというような、ちょっとさび付いているかもしれませんが、そういう感覚があるのです。それが関西の「ハル」という敬語の微妙な使い分けにもつながることかと思えます。それが、くどいようですけれど、岡崎の「オイデル」とか、別の尊敬語の表現にもつながる共通する面がきっとありはしないかと、そんなふうに思います。いかがでしょうか。皆さん方それぞれ御自分の言葉をそういう角度から見つめ、ちょっと考え直して、方言敬語についてどんなものかと。この人に言えるけれど、こっちの人には言えないとか、この人がいる前で、その人の奥さんのことをどう言えるかとか、いろいろな組み合わせを考えてごらんになると、今ここで話題になったことを具体的に検討していただける、そんなふうに感じ

ます。先ほど、阿南さんから方言というよりは敬語のことが出てきました。皆さん、いかがでしょうか。最近、若者の敬語意識 ―敬語を使うかどうか、敬語という言葉遣いについてどう思うか― がずいぶん変わってきていると言いますが、それについて何かありますか。

梅津 先ほどもちょっと触れたのですが、私は若い人に「もうこれからの世代は敬語は必要ないでしょう」とよくけしかけているのですが、否定されるのですね。私はもう定年ですから、職場でもいちばん年上ですよ。10年も20年も下の人間が上司です。彼らに私は敬語を使うのですね。もっとけしかけようと思って、「でも、心の中じゃバカにしているぜ。職場じゃ、バカにしているやつにも敬語を使っているんだよ。無意味だろう」と学生に言うのですが、「いいえ、そんなことはありません」と。ですから、若い人たちは決して敬語に対して嫌悪感ももちろん持っていないし、むしろこれからも守っていくべきだと。これは文化庁の調査でもありましたよね。若い人も圧倒的な数でこれからも必要だと言っていると分かりました。ただ、使えない。現実の問題として使えない。全く知らない。でも、これは若い人だけではない。8月に大阪に行きまして敬語のお話をしたときに、近畿地方の学校の先生の研修だったので数百人集まりました。私、いくつかクイズを出して、どれがいいか、どう言うか。めちゃくちゃでした。(笑) 本来の、この冊子(新「ことば」シリーズ 21)にあるような敬語の使い方とまるで違う敬語の使い方をしていました。私は、「あなたのは違う」と具体的に言うのは失礼だから、途中でお話をやめたのです。今、もし日本語の中の言葉が乱れているとすると、敬語が乱れているのだろうと思うのです。原因はいろいろあると思うのですが、敬語を使う場面が変わってきたのかなと。一つには、複雑になりますよね。企業と企業が合併すると、ついこの間まで向こうの会社の上の人が自分の下になることもあり得ますから、私のように15年、20年下の者が一応ハンコを持った上司になることもありますから、難しい。そういう複雑な社会関係もあると思います。もう一つ大事なのは、子供を取り巻く環境が変わった。これは敬語に限らず言葉がそうだと思うのですが、特に敬語。いろいろな調査で分かるとおり、敬語をどこで学びましたかという、家庭でした。一番は家庭なのですね。それが変わってきた。つまり、私の子供のころは、毎日夕方になると母親が近所に買い物に行く。かっぱう着のすそを持ってくっついていくのです。母親が町で私の担任に会うと、急に言葉遣いが変わる。また、魚を買うときに言葉が変わる、市場のおじさんと話をするときには

葉が変わる。町会長と会うと、また言葉が変わる。そこで私たちは敬語というものを耳で覚えて、やがて自分で使うようになって身に付いたのだらうな。その環境が今なくなっている。私は長いこと京都に勤務しました。京都に祇園祭があります。あれは伝統的に毎年夏に行われますが、1年かけて子供たちを指導するのです。何年生になると鐘をたたかせる、太鼓をたたかせる、笛を吹かせる。だんだんだんだん上がっていくのですね。それを町会場に集まって近所のおじさんが指導してくれる。そこでは靴の脱ぎ方から指導するのです。そこで言葉の使い方も指導するのです。そういう環境も今なくなってきました。お祭りはイベントといわれて、お金を払って見に行くものになってしまい、参加する者が少なくなってきた。そんな環境の変化が今、敬語を難しいものだと思わせてしまっている大きな原因ではないかなと、私は思います。

杉戸 ありがとうございます。たくさんの方の要因というか、敬語が難しくなっている原因をたくさん挙げていただきました。阿南さん、これは最後の質問になると思いますが、いかがでしょうか。ヤフーという会社の暮らしの中で、特に同僚あるいは取引先の方との間で敬語は欠かせないと思っていらっしゃいますか。

阿南 もちろんです、はい。

杉戸 そのあたりで、何か今のお話につながるようなことをお願いいたします。

阿南 私は、発表はちょっと緊張していたので、かなりめちゃくちゃなところがあったと思うのですが、わりあいしゃべれるほうだと思っていまして。大丈夫ですか（笑）。それはなぜかと申しますと、おっしゃっていたような集まりとかそういうのは一切なかったのですが、文章を書く仕事をしていたので、自分のボキャブラリーの一つとして敬語が利用できると。例えば「思います」「思います」という同じ文章ばかり書いていると文章が下手くそになってしまいますので、そういうようなところで勉強したかなあとは思っております。なので、それを駆使して上司にお話をしまして、このような無理な企画なども通していただいています。あっ、通してもらっています。（笑）

杉戸 やはり企画を通すためには言葉遣いですね。ありがとうございます。若い世代の一つの会社勤めの中での敬語についての考えを最後に伺いました。いろいろな方面に話が広がったと思います。残念ながら、御覧のとおりお約束の時間が近づいております。敬語あるいは方言、敬語の方言ということにいろいろな地域も例に挙がり、あるいは三河の言葉が具体的に例に挙がり、そういうことでしばらくのお時間でしたが過ごすことができたと思います。いかがでしたでしょうか。それでは、まだまだ話は尽きま

せんが、お一人1分とか1分半くらいで一言ずつ、まとめあるいは御感想をお願いしたいと思います。こちらの井上さんから順番にお願いいたします。

井上 梅津さんからはアナウンサーの経験を通しての幅広いお話を伺い、阿南さんからはインターネットという新しい世界での方言地図の利用について伺い、とても参考になりました。場面や地域によって人間関係の距離の取り方は様々で、社会状況の変化に伴って違ってきている点もあるというようなことを考えました。また、調査結果などは、もっと皆さんに見ていただきやすい形で報告することが国語研究所として必要だとも思いました。どうもありがとうございました。

杉戸 ありがとうございます。最後の一言は、所長としてもありがたい発言だったと思います。阿南さん、どうでしょうか。

阿南 はい。私、初めて国立国語研究所の先生方から「岡崎で敬語の調査をやっているんだよね」と聞いたときに、すごく驚いたのですよ。日本でそれこそものすごい歴史があって由緒のある研究がなぜこの岡崎で行われているのだろう、とすごく不思議でした。そうしたら、その先生が「日本の中心だから」と言ったので、またちょっとテンションが上がってしまったのですけれど。(笑) これはやはり、本当に偉大なる私たちの地域の英雄徳川家康が日本を統一したぐらいのかなりの快挙だなあと個人的には思っています。私は、言葉が変わっていくのは構わないと思っているのですよ。流れるものだと思っております、だから乱れるのはいっこうに構わないのですが、ただ、今この言葉がこのように話されているということだけは絶対に記録しておかねばならないと、若輩者ながら思っております。ここにいらっしゃる皆様の御協力で、岡崎という町でこういう調査結果が出ましたよというのが、日本に広く広がるのはすごくいいことだと思っていますので、この調査がぜひぜひ、敬語が出てきませんが(笑)、うまくいけるといいなあと思っております。

杉戸 ありがとうございます。岡崎の御出身の方としては自然なお気持ちだと思いますが、逆に私どもからすれば、本当にありがたいお気持ちでもあります。ありがとうございます。最後、今日はたくさん話題を提供していただきました梅津さん、どうぞお願いいたします。

梅津 私、大阪に勤務したとき、初めて取材に行ったお宅で「ごめんください。いらっしやいますか」と言ったら、返事をしてもらえなかったことがあるのです。しかられたのです。「そんな他人行儀な言葉を使うやつに話なんかできるか」と言われました。

「じゃあ、なんて言えばいいんですか」と言ったら、「おるかいと言え」と言われたのですね。(笑) つまり言葉とは、どんなに正しいといわれる言葉を使っても、どんなに正確な敬語の使い方をしていても、相手に通じる、相手の心を開くとは限らないと思うのですね。言葉は、自分が言いたいことを自分の言葉でどんなに正確に一生懸命整然としゃべってみても、相手に伝わるとは限らない。やはり、その言葉を相手がどう理解し、どう納得できるかということを考えて使わないと、コミュニケーションを取れないと思うのですね。ですから、その言葉を使って仕事を毎日している私はともかわいそうだなと思います。(笑)

杉戸 どうもありがとうございました。来月、私どもの調査員は一軒一軒お宅を訪ねてまいります。そのとき、なんと行って声を掛けると答えていただけるでしょうか。(笑) 「おいでる？」では駄目でしょうか。また教えていただきたいと思います。以上で、このトークショーを終わらせていただきます。いろいろな話題に広がりました。それぞれお手元にペンを動かしながらお聞きいただいているのをこちらから拝見して、ちょっと押しつけがましいのですが、最初の御挨拶の中で申し上げました、今日のこの2時間が、それぞれお聞きいただいた皆さんお一人お一人の御自身の言葉、あるいは周囲の皆さんの言葉をふと立ち止まって考えていただくきっかけになる、そんな手掛かりを得ていただけた時間であったことを期待し、お礼とともに申し上げます。本当にありがとうございました。最後に、こちらの3人に拍手をお願いいたします。(拍手) それでは、進行を全体司会の朝日に返します。どうもありがとうございました。

司会(朝日) 今日予定しておりましたプログラムは、これをもちましてすべて終了となります。2時間という時間があったという間に過ぎました。いかがでしたでしょうか。これをもちまして、第34回「ことば」フォーラム「敬語と方言—ふるさとのことば—」を終了したいと思います。本日はどうもありがとうございました。(拍手) それから、1点だけお願いがございます。先ほどもお伝えしたことですが、アンケートを用意しております。「今日のフォーラムは質問の時間がなかった」ということがあったと思いますが、6番にそのようなお気持ちに答えるスペースを用意してございますので、ぜひ御記入のうえ提出してお帰りいただきたく思います。どうかよろしく願いいたします。

<終了>